

## 日蓮聖人御遺文上における

# 我国の人口（四十九億）に就て

山口県山陽町植生妙蓮寺住職 吉本前教

はじめに

今より約二十数年以前になると思うが、宗祖日蓮聖人の法脈をつぐものとして、一度は宗祖の遺文の全部を拝読したいものと考え、元日から小一年かかって毎朝の「おつとめ」に木柩を打ちながら精進して、その年の秋も終わろうとする頃、縮刷御遺文の三百九十編と続集七十八編を全部拝読することができた。

宗祖の思想の一貫した流れを感得することができ、不借身命の法華経弘通の御意旨に接して幾度となく感涙にむせんだのである。

我門下、少なくとも本宗寺院住職たるもの一度は必ず宗祖御遺文の全部を拝読しなければ宗祖の全体に接することはできない。布教に対する熱情は入らないと考えるようになり、以来折にふれては御遺文の皆読を提言している。

若い教師諸君は勿論、年輩の御住職にしても、ほとんどが五大部か要文集等にある有名御遺文だけくらいしか拝読していない。なかにはあらかた拝読しましたが、と云う人がある。そんな人には意地悪のようだが、こんなテスト、をしていた。

「宗祖の御遺文には当時の日本の人口が、いかほどで  
ていましたかね？」

それはおぼえませんが、とかそれは知りませんと云はれた人は、御遺文の全体を拝読されていないと私は思っている。

その理由は、現代から考えれば甚だ奇異な、当時の我国の人口が「四十九億云々」と十ヶ所におよんでしるされているからである。この甚だ奇異な数字が十ヶ所もあるのに、それが心に残らない筈がないと思うからである。それらの

御書を左にあげてみよう。

一、該当御遺文

右のようなことから、このことについて、ささやかな研究をすることになったのであるが左に該当の御遺文をかかげてみよう。

日眼女釈迦仏供養事 昭和定本遺文一六二五

日本国と申すは女人の国と申す国なり、天照大神と申せし女神のつきいだし給へる島なり。この日本には男は十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千八百三十人も、此の男女は皆念仏者にて候ぞ。

新池殿御消息 同一六四一

日本国の男女四十九億九万四千八百二十八人ましますが、某一人を不思議なる者に思いて、余の四十九億九万四千八百二十七人は、皆敵となつて、主師親の釈尊をもちいぬだに不思議なる。

秋元御書 同一七三一

そもそも日本国申すは十の名あり、扶桑、野馬台、水穂、秋津島、等なり、別しては、六十六箇国島二つ、長さは三千余里、広さは不定なり、或は百里、或は五百里等、五畿

七道、郡は五百八十六、郷は三千七百二十九、田の代は上田一万一千一百二十町、乃至八十八万五千五百六十七町、人数は四十九億八万九千六百五十八人も、神社は三千一百三十二社、寺は一万一千三十七所、男は十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千八百三十人も、其の男の中に只日蓮第一の者也

曾谷殿御返事 同一六六三

今日本国の人々四十九億九万四千八百二十八人の男女、人々ことなれども同じく一つの三毒なり。

上野殿母尼御前御返事 同一八一二

日本国に一切経わたれり、七千三百九十九卷也、彼々の経々は皆法華経の眷属なり。例せば日本国の男女の数四十九億九万四千八百二十八人候へども、皆一人の国王の家人たるが如し。

智妙房御返事 同一八二六

しかるに今日本国の四十五億八万九千六百五十九人の一切衆生、善導、恵心、永観、法然、等の大天魔にたばらかされて釈尊をなげすてて阿弥陀仏を本尊とす。

諫曉八幡抄 同一八四七

弘法等の三大師は法華經の名をかきあげて戲論などとかかれて候。(中略)今三大師の教化にしたがひて、日本国四十九億九万四千八百二十八人の一切衆生、又四十九億等の人々四百余年に死して無間地獄におちぬ。

其他、八幡宮造営事、曾谷二郎入道殿御報、光日上人御返事、等も該当御遺文である。

## 二、日本人口史

『日本の人口』(和歌山大学教授、経済学博士、関山直太郎著 昭和三十四年)によれば

我國の歴史では、崇神天皇十二年(前八五年)に「校民」すなわち人口調査をしたという記録がある。それはすでに存在した戸籍簿によったのか、あるいは簡単な戸口調査に終ったのか、明らかでない、欽明天皇元年(五四〇年)には秦、漢、二代をはじめ来朝帰化人について戸籍を設け、また同三十年と敏達天皇三年(五七四年)には皇室直轄の屯倉に属する部民について戸籍を作ったといわれるが、それらもどんな方法で、どれだけ正確に、またどのくらいの期間にわたって行われたものか、今日これを明らかにすることは不可能である。しかしこれらのうちのあるものは単なる伝説かもしれない、また実際に行われたとしても、それは調役の賦課か異民族対策の必要から部分的調査であり局地

的な戸籍の編成であつて全国的なものではなかつた。全国的に戸籍が作られるようになったのは大化改新(六四五年)以後のことであつて、二年正月の改新宣言の第三項に

「初めて戸籍、計帳、班田収授、の法を造れ、凡そ五十戸を里となし、里毎に長一人をおけ、戸口をかむがえおさめ、農桑を課殖せよ云々」

とあることは周知のとおりである。もつとも戸籍を作るべきことは前年すでに国司への詔によつて令せられていたが、ここに改めて制度として定まつたのである。大化二年から寛弘元年(一〇〇四年)まで三百六十年間は、とぎれながらも、また決して全国的とはいえないまでも、ともかくどうやら作られた形跡もあるが、中央古代国家権力がおとろえて、土地国有制度もゆるみ、その反面として荘園制度を中心とする新しい社会経済機構へのうつり変りとともにいつしか制度もくづれてその跡を絶つてしまつた。

右のべられているように古代我國の戸籍制度は完備されようとした努力の形跡はあるものの、実際には、その目的を完全にはたすことはできなかったのである。又同書には古代及び中世の全国人口推計において左のよりのべている。

我國では徳川時代以前には全国人口を調査した例は

ないのであるから古代や中世の人口を文献によって知るといふことはできない。もつとも世上には往々、上古中古、中世の全国人口として伝える数字がないではない。例えば聖徳太子の伝記と称するもの、行基菩薩に関する書、或は日蓮の遺文録などに記載する、もしくは記載すると称する計数がそれであつて、徳川時代の学者や明治初期の学者の中にはそれを引用するものが少なくない、その数は大同小異であるが、聖徳太子に関するものは四百九十何万人（崇峻、推古時代六世紀）とするものが多く、行基菩薩に関するものは或は四百五十何万人とし或は八百六十万人（聖武天皇八世紀）とし、日蓮に関するものはほぼ聖徳太子に関するものと等しい。

右の如くしるされているように、日蓮聖人の四十九億云々は四百九十万であり、当時の一億は十万であることは学者の認めるところである。

『日本人口史の研究』（高橋梵仙著大東文化大教授、文、経済学博士 昭和十六年）には

上古、中古、近古時代ともに我国の人口数は全くわからないが、若し強いてこれを知らんとすれば、その当時のもので現在に残れる戸籍計帳、輸租帳の断片によつて推計し概算を得るより他はない。然るに釈整察はその著、

『三国事蹟温故要略』卷二に、

「日本の人数古来の記ある事」の条には「太子伝抄に云く、男は十九億一万四千二十人、女は三十一億一万六千九百三十人といえり」と、又、

井上瑞枝の『大日本国古来人口考』には平氏撰の『聖徳太子伝記』を引いて、

「崇峻天皇二年の人口は男は九十一万四百二十人、女は三百一万七千三十三人、合して三百九十三万一千百五十二人」とあり、また、

松井輝星の著『它山石初編』卷之二、に『十玄遺稿』なる書より引用したるとして太子伝抄を採用したるものには、

「男は十九億一万四千二十人、女は三十一億一万六千九百三十人と見ゆ、これには女子は十二億二千八百八十人男子より多きなり」と、同じく『太子伝』を引用して『太子伝』に云く

「男子口数十九億九万四千八人、女子口数二十九億九万四千八百三十四人、女、男より多きこと六億四千七百八十三人、男女合して四十九億八万八千八百四十二人」とある。

関山直太郎は勿論、井上瑞枝、松井輝星、等、学者によつて『太子伝』を引用するに当り、原文のまゝに四十九億云々等と記るされたものと、十万を一億として現代的に書

きかえたものがある。同じく『日本人口史の研究』には新井白石の著として、

『折たく柴の記』下巻には、

「六十六州の戸口の数はたしかならず、但昔、上宮太子摂政の時にかぞえられし、五百万人にたらざりしと見え、其時四百九十六万九千八百九十人としるされしとも見ゆ」

とあつて白石は億の数字を使用していない。

### 三、鎌倉時代の人口と宗祖の遺文

『日本人口史の研究』においてはさらに稿を進めて宗祖の遺文を当時の唯一の資料として引用していることはことに注目に価いするものがある。関山直太郎も宗祖の遺文を引用しているが、高橋梵仙にいたつては実に詳細にわたつていて門下の我々にとつて汗顔の至りである。左にそれを紹介しよう。

鎌倉時代における人口数は如何、是も亦研究が至難である。この時代においては人口数推算の根拠となるべきものが一つもない。ただ当時のものである、立正大師が信徒に宛てた書翰の中に見えるのみである。

弘安二年巳卯二月二日の、日眼女御返事に、  
「日本には男は十九億九万四千八百二十八人、女は二十九億九万四千八百三十人」と、

弘安二年八月十七日の「曾谷の道宗御返事」に「今日本国の人々四十九億九万四千八百二十八人」と、弘安三年庚辰正月二十七日の「秋本太郎兵衛殿御返事」に、

「五畿七道郡五百八十六郷は三千七百二十九、——中略——人数は四十九億八万九千六百五十八人也云々」と、  
其他、弘安四年七月一日の曾谷二郎入道殿御報、同八月八日の光日上人御返事、等をくわしく書きつらねているいとは感服に価いするものがある。ついで、

立正大師は如何なる資料にもとづいて、この数字を示したのであるか、其の辺のことは全く不明であるが全然虚偽でもないように思はれる。  
と託し、註として、

立正大師とは日蓮宗の開祖日蓮聖人のことで、皇紀一千八百八十二年、人皇八十五代後堀川天皇の真応元年二月十六日に東海の辺隅たる一漁村、安房国長狭郡東條郷市河村小湊に呱呱の声をあげ、建長五年四月二十八日開宗、弘安五年十月十三日に六十一才を以て、武州千束の郷、池上宗仲の館にて入滅した。

立正大師の日眼女御返事は、「日眼女釈迦仏供養事」、或は「興四糸氏妻書」と、「曾谷の道宗御返事」とともに大師五十八才の時のもの、「曾谷殿御返事」と、「秋本太郎兵衛殿御返事」は大師五十九才の時のもので「筒

御器鈔、或は「秋本御書」とそれぞれ呼ばれ、又、「曾谷二郎入道御報」は大師六十才の時のもの、光日上人御返事も大師六十才の時のもので「報光日尼書」と呼ばれている。

右の如く宗祖の遺文を詳細にあげて鎌倉時代の人口を知る唯一の資料として評価している。

さて、そこで宗祖は如何なる資料によってこの数字を示されたのであるか、関山直太郎の『日本の人口』に示されている如く、「日蓮に関するものは聖徳太子に関するものと等しい」とのべているように、古今の乏しい資料文献に照らして『太子伝抄』平氏撰の『聖徳太子伝記』と称するものによつて示されたと考えるのが至当であろう。

#### 四、世親菩薩の俱舍論は我國数学の原点か！

『日本人口史の研究』は、西川求林斎の著、『七山石初編』卷二、に於て、

「十千を万と云う、十万を億と云う時には一百万は十億にして壹千万は壹百億となる」とあり、

又、横山申請は、『食貨志略』『本朝古来人口考』に於て、「一億は十万なり」と説き、西川求林斎と同説である、と  
いい、又、

然るに此の計算方法は印度に起原を發し、世親菩薩の「阿毘達磨俱舍論卷第十二」に

「一有り余無し数の始めを一となす、一十を十となし、十十を百となし、十百を千となし、十千を万となし、十万を洛又となす」

数量は十進法にして十万以上は総て億と称んだのである。而して一億は十万に当り、これを洛又と称するのである。

この俱舍論が我國へは中国を経て孝徳天皇の朝に道昭、智通、智達、等の諸僧によつて伝えられ、而してこの計算方法が採用されたのである。

右のように述べていることを見れば、我國の数字の原点は仏教と共に伝わり、世親の『俱舍論』を以て始めとすることになる。

尚、億の數位について註解を加え、

「古人の計數觀念は極めて粗雑であつて、『行基式目』には「本朝六十余州の男女、凡五百万人也、対異朝謂二百億也」とあるが、異朝即ち外国に対してばかりでなく、日本国中だけの事であっても人口については十倍にも二十倍にもしてあるものがある。

「訳識名義集」卷第三数量篇第三十六に、「億に四等を分つ、一には十万を以て億となし、二には百万を以て億となし、三には千万を以て億となし、四には万万を以て億となす」即ち億には十万、百万、千万、万万の四種があるが、我国上中近古の人口數に云うところ

の億は以上の四種の内、何れをさすか不明であるが、前説の如く、西川求林齋、横山申請、に於てはいづれも「一億は十万なり」と同説である。」と。

尚、日蓮聖人遺文講義第十四卷三三八頁、「上野殿母尼御前御返事」の註に四十九億云々をあげて、

この時代の億の単位は十万を以てしたものであるから四十九億は今日の四百九十万となる、四十九億の文字を直に今日に移すときは非常なる差誤を生ずる、決して誤つてはならぬ。

としるされている。

以上書きつらねたことを綜合するに、「古人の計數觀念は極めて粗雑」といわれているように、億の数に至つては日常ほとんど使用することがなく、億の単位に就ては決定的なものがなく、時により人により、まちまちであつたように考えられる。しかれば今日の如く万万を以て億と称する単位は何時の時代より用いられるようになったのか、その点については全く不明である。

但し宗祖の遺文に關しては「太子伝」の數字を引用され、一億は十万、の単位であり、四十九億は四百九十万と解することが正しいと考へる。又鎌倉時代における唯一の我国人口に対する資料として貴重な存在である。尚、ささやかな研究に対して御教示の点があれば幸甚である。